

2008年3月19日

高橋先生の歓送会でのあいさつ

専攻長 奥田一雄

サッカーの競技時間は前・後半それぞれ45分と決っています。しかし、選手の入替や負傷者の救護などで時間が取られたとき、レフリーは45分の競技時間を越えて試合を続行させることができます。この追加される競技時間がロスタイムです。

最近、「ロス：タイム：ライフ」というテレビ番組を見ました。サッカーの競技時間を人間の一生に喩えた物語です。予期していない突然の死に見舞われるその直前に時間が止まり、その人はレフリーからロスタイムが与えられます。数時間のロスタイムの中で、自分の人生でやり残したこと、やりたかったことができるのです。生きている間に知ろうとしてこなかったことや知らなかったこと、人からの、また、人へのいままでに意識しなかった想いが次々に浮かび上がり、与えられた人生の終焉を自ら演出します。

ロスタイムで何をするかを考えるとき、人は人生を俯瞰するのでしょうか。自分は周りの人々とどのようにつながってきたのか、自分がいる場所や境遇が他の環境とどのように関わり合っただけそこにあるのかを、過去から現在へ一気に見通す。高いところに昇るにつれ、景観がどんどん広がってくるように、いままでに気づけなかった物事が見えてきます。地上で歩んでいたその時々の中で見渡せなかった数々の発見があるにちがありません。

これは、あたかも高橋先生がかねがね仰ってこられている黒潮圏研究科の教育研究のありかたに通じます。人間社会の問題、自然界で起こる様々な現象を俯瞰し、問題に潜む様々な関係性を認識して課題を解決する。そのために、既存の学問体系を越え、文理を融合した新しい学問、すなわち黒潮圏科学を創出し、持続型の社会を追究するということです。遠大なミッションです。

高みに上がって視野が広がっても、そもそも足許以外の風景を見るための鍛えた目を持っていなければ何も始まりません。私たち自身の見識と学問的バックグラウンドに文理融合の地ならしを入れ、そして、高橋先生がデッサンされてきた黒潮圏科学のかたちをこれからもしっかりと創っていくことが大切です。

現実の人生にロスタイムはありません。今ある時間を、喜怒哀楽を含めて思い切り楽しむこと。これは、高橋先生がいつも満面の笑みをたたえられ、「楽しくやりましょう！」と声をかける言葉に集約されています。もしロスタイムが

与えられればその時に想うと予想される黒潮圏科学の道程を，私たちは日々常に意識して仕事することであると思います。

高橋先生には，研究科の教員と職員，学生にいつも温かく接していただき，それとともに，4年間に渡って研究科を強く支えて牽引していただきました。ここに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。